SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

産業と婚姻から見た人の移動

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深澤, 静香 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9316

産業と婚姻から見た人の移動

深澤静香

1　はじめに
2　由比の交易と産業
　2.1　交通の要衝としての由比
　2.2　交易と産業
　2.3　「外」とつながる由比
3　ミカン産業等の労働者の流入と定住
　3.1　ミカンの労働者：「援農」と「季節工」
　3.2　季節工の婚姻
4　由比への嫁入り
　4.1　東山寺区
　4.2　西山寺区
　4.3　婚姻によって由比の人になる
5　考察：産業と婚姻から見た人の移動
6　おわりに

1　はじめに

静岡市清水区由比は東海道交通の要所にあたり、その西側に位置する薩埵峠は東海道の「親知らず子知らず」[1]としても知られる難所である。

こうした由比に対する印象を持っていたことから、私は由比の交通、とくに薩埵峠を行き交う人々の流れに着目することを当初の課題とした。しかし、文献等で由比の交通の歴史を調べたところ、南北の交易、つまり内陸交通も多数存在することがわかった。また、由比で聞き取り調査を進めていくうちに、ミカン農業の労働者の往来や婚姻などによる「外」からの人の流入があることもわかった。そのため、由比へ嫁いできた人に話を聞くことにした。

このような経緯から、本章では由比の交易に関連した人の往来と、産業や婚姻といった外との交流の中にある由比の姿を見ていく。

ここでは、由比の中のさらに細かい地名にはそれぞれ区を付けた。同様に、旧清水市の地名にも区を付ける表記に統一した。また、聞き取りはいずれも 2015 年 5 月に実施し、聞き取り内容に個人的な内容が含まれるものについてはインフォーマントの名前を仮名にした。

[1]　険しい道のため通行が困難で、親も子も互いにかえりみる余裕がないことからこう呼ばれる。

2　由比地区の交易と産業

本節では、由比の交通の概要や交易について触れる。

2.1　交通の要衝としての由比

由比では、東海道新幹線、JR 東海道本線、東名高速道路、国道 1 号、旧東海道が駿河湾に並行する形で東西を繋ぎ、これに垂直に交差する形で静岡県道 76 号富士富士宮由比線が、山がちな内陸部へ南北方向に伸びている。東は静岡市清水区蒲原、西は静岡市清水区興津に接し、その境に薩埵峠がある。各交通機関と由比周辺の詳しい位置については下の図 1 と図 2 を参照されたい。

また、建設省静岡国道工事事務所によれば、興津や薩埵峠などの一帯は日本を東西に画する境界であると同時に、山間部と臨海部を結ぶ接点でもあり、さまざまな人や物が行き来したという（建設省静岡国道工事事務所　1994）。

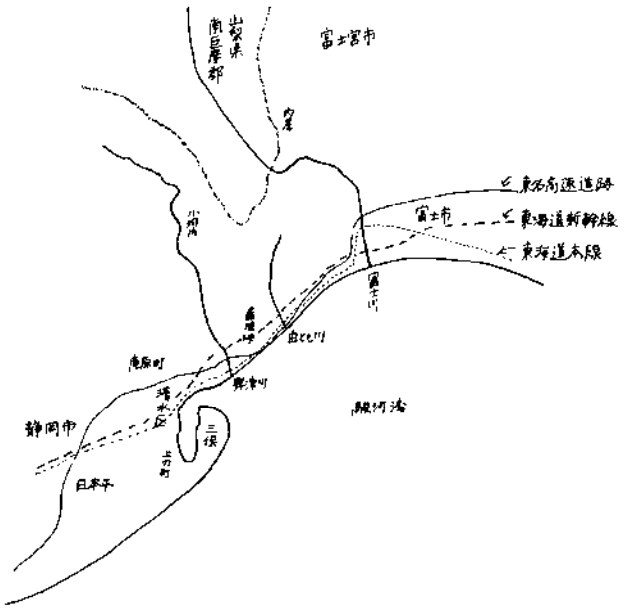

図 1　由比周辺広域地図　（『街の達人　静岡　便利情報地図』[2009] 掲載の静岡県周辺図および清水をもとに深澤作成）

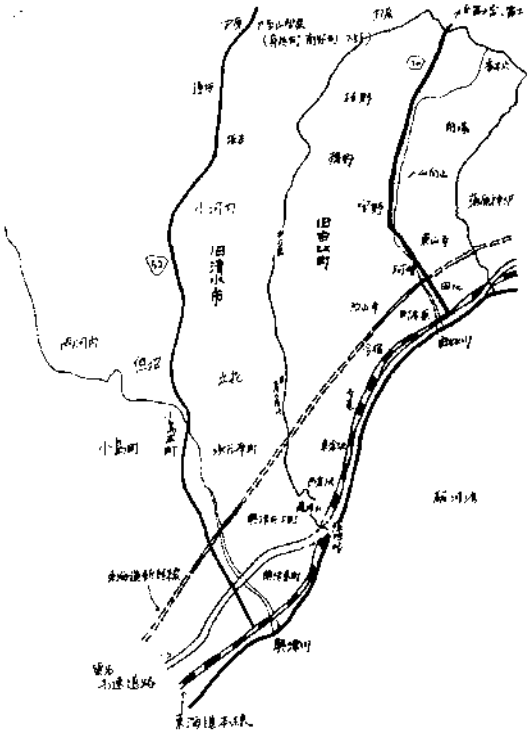

図 2　由比周辺詳細地図
（『町屋原・今宿の民俗』掲載の「現在の由比」をもとに深澤作成）

2.2　交易と産業

次に、具体的な内陸交通について見ていく。

建設省静岡国道工事事務所は、由比の薩埵峠について以下のように述べている。

> 薩埵峠は、東西方向の交通、つまり東海道に、南北方向の交通が山上で接続するという形になっていた。……海と内陸部を結ぶ南北の交通と交易は、この山塊一帯にはりめぐらされた峠道を通い路として行われていたのである。……甲斐の国境から最短のルートで東海道に接続する山と川が、薩埵峠一帯であったことは間違いない。その山道とは、内陸部の生命線ともいうべき塩を運ぶ道であった（建設省静岡国道工事事務所 1994：44-46）。

さらに、静岡県教育委員会文化課県史編さん室は、由比の中心部に位置する静岡市清水区由比町屋原区について以下のように述べ、交通における由比の位置や役割を示している。

> 東西交通の接点に、海と山をつなぐ南北の道が交差する場所として、由比が「塩の道」

の起点になっていたことを示している。後年の甲州に魚を運ぶ「イサバ」の伝統は、町屋原における海の民の交易性の歴史を象徴する。このように、塩に代表される海の幸が古くから生産され、それが山の幸と交換されていた場所性を設定できる（静岡県教育委員会編文化課県史編さん室編　1992：27）。

また、前掲の建設省静岡国道工事事務所は、前述の「イサバ」について以下のように述べている（前述の「イサバ」と後述の「イサバ衆」は同義）。

甲州への行商には、魚を売り歩くイサバ（五十集）衆がいた。ザルに魚を入れ天秤棒でかつぎ、列をなして甲州へ運んで行ったという。……イサバは天秤棒をかついでいるから、急坂では通れない。そこで、比較的ゆるやかな川沿いの道をルートどりしていた……コニダの道が、山の上の長峰道をルートどりしていたのに対し、イサバの道は川沿いの下の道をルートどりしていた（建設省静岡国道工事事務所　1994：51）。

さらに、前掲の静岡県教育委員会文化課県史編さん室によれば、コーシューアキナイ（甲州商い）という由比の産物を天秤棒に担いで甲州方面へ売り歩いた行商があり、静岡市清水区由比入山区（青木の峠）を越えて、山梨県の身延町、南部町の辺りまで売りに行ったという。向こうでは「由比のエビヤ」で通っており、売り歩く海産物は多少の加工がなされていたという（静岡県教育委員会文化課県史編さん室　1992）。

また、塩などを馬で輸送していた運搬業者のコニダ（小荷駄）についても、以下のように述べている。

コニダのルートは、今宿の問屋を出発すると、西山寺[2]から山の登りに入り、峰の横道を通って……「身延道[3]」に合流していた。桜野[4]と逢坂[5]あるいは坂本[6]を結ぶ小道は、かつて「ヨメッコ道」とも呼ばれていた（建設省静岡国道工事事務所　1994：51）。

次に、人の移動の最たるものとして婚姻に着目すると、静岡県教育委員会文化課県史編さん室によれば、興津川[7]流域の村々が通婚圏になっていたという。さらに、暮らしぶりの良い村へ嫁に来る人は多く、峠道はヨメッコ道と呼ばれ、桜野区から坂本区、静岡市清水区由比入山区槍野・阿僧区から坂本区、西山寺区から静岡市清水区但沼区へ抜ける峠道がよく使われたという（静岡県教育委員会文化課県史編さん室　1992）。

2　静岡市清水区由比西山寺区。
3　現在の山梨県へ至る道。
4　静岡市清水区由比入山区桜野。
5　静岡市清水区宍原区の地名。
6　静岡市清水区小河内坂本区。
7　現在の静岡市清水区興津を流れる川で、由比からは薩埵峠や浜石峠を越えた西側にある。

以上のように、由比は東西交通の要衝であると共に内陸部との接点であり、塩や魚などの海産物を介した交易といった南北交通においても重要な位置を占めていたことが文献資料から見てとれる。次に、聞き取りから見る内陸交通について見ていこう。

観光案内ボランティアの古牧資晟氏（男性、69 歳、町屋原区在住）によると、塩の道は入山区から北東に向かう道を通り、富士市の方へ抜けていったのに対して、天秤棒で魚を売り歩く「イサバ衆」は、入山区にある「銚子口の滝」から、青木峠[8]を通ったという。

また、古牧氏によると、イサバの道とヨメッコ道は関係があるという。80 年程前までは、花嫁は西山寺立花線[9]を通って来て、帰省にもこの道を使った。たとえば、町屋原区に 80 年程前に嫁入りした人は、静岡市清水区両河内区から西山寺立花線を通ってきたという。西山寺区と静岡市清水区立花区を結ぶ西山寺立花線は、かつては重要な道路であったが、現在では道路は残っているもののあまり使われることはないという。車のない時代は、わざわざ南の薩埵峠まで行かず、甲州（山梨県）や興津の人は東海道に出るために立花区、西山寺区、静岡市清水区宍原区、入山区をとおり、江戸に行くにも当時は、薩埵峠の峠道を通るよりも安全で近い西山寺立花線を通った。西山寺立花線の途中の、現在の立花区にある立花の池（あるいは立花の唐池ともいう）を通るのが近く、水の補給をすることができた。この道は立花区から西山寺区を通って町屋原区に抜けた。

そして、西山寺立花線は塩の交易で使われた「塩の道」でもあり、静岡市清水区蒲原神沢区に住む男性の祖父が、天秤棒を担いで安倍奥まで塩を売りにいったと聞いたことがあるという。その男性とは、古牧氏より 20 歳以上年上の人の祖父であるので、かなり昔の話である。甲州から来る人は、内房桜野線[10]を通り、今はもうない集落を経てきたという。西山寺立花線を通って東にいくときには、西山寺区、町屋原区、静岡市清水区由比東山寺区、静岡市清水区由比入山区向山、静岡市清水区由比入山区舟場、静岡市清水区由比入山区香木穴というルートで通っていたという。

さらに、古牧氏が幼い頃には、向かいに住んでいた江戸時代生まれの女性が、皆で連れ立って西山寺立花線を通って静岡市北部の安倍奥の地域まで茶摘みに行ったという。安倍奥にお茶摘みに行った女性に関して、静岡県教育委員会文化課県史編さん室によれば、静岡市近郊の茶業地帯にお茶摘みの出稼ぎに行く女性が大勢いたとある。女性たちは「お茶摘みさん」と呼ばれており、町屋原区にはその斡旋をする「ケーアン」や「チャヒキ」と呼ばれる人がいたという（静岡県教育委員会文化課県史編さん室　1992）。しかし、この場合は電車を使ったようである。

2.3　「外」とつながる由比

以上のように、現在の由比は東西交通に注目されがちであるが、実際は塩の道、イサバ、

8　静岡市清水区由比入山区桜野から富士宮市内房瓜島区を通って山梨県南部町万沢区に抜ける道。
9　古牧氏によると、1889（明治 22）年の町村合併後、旧由比町が最初に作った道であるという。
10　富士宮市内房区と入山区桜野を結ぶ道。

コニダ、ヨメッコ道、そしてコーシューアキナイなど、南北の交通や内陸交通が多数あったことがうかがえる。また、一言に南北交通といっても塩の道とイサバの道では入山区からのルートが異なるとこがわかった。さらに、安倍奥への出稼ぎなど由比から出ていく人の流れもあり、いずれも由比の人々の生活にかかわる移動であった。つまり、内陸部の交易が由比の生活を支えており、多くの人の行き来があったといえる。

続いて次節では、生活や産業に関連した人の移動として、労働者、特に由のミカン産業に関連した人の流入について見ていく。

3　ミカン農業等の労働者の流入と定住

本節では、主にミカン農業に従事するために由比に来た労働者の流入と結婚に伴う定住に焦点を当てていく。

由比はかんきつ類の栽培が盛んである。聞き取り調査に応じてくれた人の多くは、このように以前、ミカン農業が活況だった頃に、東北などの地域からやってきた、稲刈りの後の農閑期に農作業などを手伝いに来る人を「援農者」、そして、缶詰所での加工業にたずさわる人を「季節工」と表現していた[11]。ここでいう援農者と季節工は、どちらも移動班とも表現されたようであり、いずれも季節労働者（季節労務者）として扱う。

3.1　ミカン農業の労働者：「援農」と「季節工」

由比町史編さん委員会によると、1947（昭和 22）年に、長野・山梨・東北と富士・駿東方面から移動班と呼ばれる人たちがミカン農家に泊まり込みでミカンの採取を応援しに来たという。1952（昭和 27）年には、旧清水市庵原郡で援農者受け入れ協議会が設立され、1960（昭和 35）年には 7882 人を受け入れ、由比でも 1049 人を受け入れた。しかし、その後の 1972（昭和 47）年の豊作によるミカン価格の暴落や高度経済成長により季節労務者の獲得が難しくなったことなどで、1981（昭和 56）年に援農者受入協議会は解散したという（由比町史編さん委員会　1988）。

また、静岡県教育委員会文化課県史編さん室によれば、由比の山持ちの家ではミカンの収穫時期になると移動班を頼み、依頼主の農家が移動班の滞在中の食事などをすべて準備し空いている部屋に住まわせたという。農協がその移動班を斡旋し希望した人数をそろえた。移動班の人は 11 月 23 日の勤労感謝の日頃に来て、年末の 12 月の 25 日頃には帰ったという（静岡県教育委員会文化課県史編さん室　1994）。

また、労働者募集のポスターも作成されていた（写真 1）。静岡県の温暖な気候を売りにしている様子が見てとれ、女性が農作業をしている姿が描かれている。

[11]　農業については猪原の第 5 章、缶詰（後述の由比缶詰所）については石山の第 6 章が詳しいので、そちらを参照してほしい。

写真１　労働者募集のポスター（『静岡県の歴史＜上巻＞』より）

季節工について、静岡県缶詰史編纂委員会は次のように述べている。

> 缶詰工場の作業は多くの女性の手を必要としたが、特にミカン缶詰シーズンにはその期間だけの従業員を募集している。募集地域は山梨、長野、新潟の諸県と東北地方を主とし、ミカン缶詰製造期が農閑期にあたるため農家の女性が多かった（静岡県缶詰史編纂委員会　1975：76）。

さらに、前述の観光ボランティアの古牧資晟氏によると、援農者が来た時期のピークは、1952（昭和 27）年頃から始まって 1965（昭和 40）年頃に終息していったという。ミカンの最盛期のころに、地元の人はどてら（綿を入れたはんてん）は着ないのに、季節労働者はどてらを着て歩いており、そういう人は東北からきたのだと思ったという。援農者は、一斉に来て一斉に帰ったという。また、援農者として来ていた人やミカン缶詰の「女工（季節工）」として来た人がこちらで結婚したケースも多いという。

現在、由比ではミカン加工はおこなっていないが、昔はミカンとマグロの缶詰を作っていたという。これについて、昭和のアルバム編集室『昭和のアルバム　静岡・清水』（2105）によると、清水食品では夏場はマグロ缶、冬場はミカン缶詰を作り清水港から輸出していたとある（昭和のアルバム編集室　2015）。

3.2　季節工の婚姻

次に、ミカンに関連した産業としてミカン缶詰の製造が挙げられる。今回調査では、由比缶詰所でミカンの缶詰を作っていた時代に、季節工として働いていた人で、現在も由比に住

んでいる人の話を聞いた。その聞き取り調査をもとに由比に来た経緯や年代をまとめたものが表 1 である。

表 1　由比缶詰所で働いていた人たちの婚姻　（聞き取り調査より深澤作成）

	A 氏	B 氏	C 氏
年齢	73	81	78
今の住所	町屋原区	静岡市清水区由比由比区	由比区
出身地	青森県二戸市	山梨県南巨摩郡身延町	静岡県富士市
由比に来た理由	ミカンの缶詰の季節工（移動班）として集団で来た	17 歳の時紹介でミカンの箱詰めの仕事をするために来た	お見合い（由比缶詰所で働き始めたのは結婚後）
結婚した年	1970（昭和 45）年	1951（昭和 26）年	1958（昭和 33）年
結婚した年齢	29	24	22
婚礼道具	由比で揃えた	由比で揃えた	トラックで運んできた
結婚相手の職業	製作所に務めていた	下駄工場で働いていた	塗装業をしていた
どこを通って何を使って由比に来たのか	夜行列車を使って来た	身延線と東海道線を乗り継いできた	旧道の東海道を来た
地元と由比の違い	雪が降らないこと	交通の便がいい 隣り近所がある 働く場所がある	暖かくて霧のないこと、由比の人は団結力が強いと思う
同じようにして由比に来た人は多いか	結構いる、多い	多い	そんなにいないが 3〜4 人は知っている
里帰り	費用がかかるので実家には帰れない	昔は電車とバス使って帰ったが、今は交通の便も悪くなり車で帰る	地元へはバイクで帰る

この他にも、季節工同士で結婚した D 氏（男性、74 歳、阿僧区在住）から話を聞いた。D 氏は新潟県、妻は岩手県から別々の缶詰所に季節工に来ていた。その後、D 氏は富士市

の運送会社で運転手として由比で作った缶詰を旧清水市（現静岡市清水区）に運ぶ仕事をしていた。その際に、旧清水市で働いていた妻に出会い、恋愛結婚をして由比に家を買ったという。

このように、ミカン農業が活況だった時代には、ミカン関連の産業に従事するために東北地方などから由比に来た労働者がおり、その一部の人々が由比で婚姻し、定住していることがわかった。また、表 1 に示したように、比較的遠いところから嫁いできた人は由比で嫁入り道具をそろえたようである。

B 氏の聞き取りにあったように、地元に働く場所がなかった人たちが、仕事を求めて由比に来たということもあった。また、多くが東北地方など寒い地方の出身で由比の温暖な気候による産業や活発な経済活動のためにやってきた。

以上のように、由比ではミカン産業に関連した人の流入があったことがわかった。

また、ミカン農業以外の産業に関連して労働のために由比にやってきた人の流れとして、「センドー」が挙げられる。静岡県教育委員会文化課県史編さん室によれば、センドーとは、桜えび漁のフナモトの家に住み込みで働きに来ていた漁師のことで、千葉県や青森県方面から来ていたという。桜えびの漁法の変化などにより雇われなくなったが、桜えびの値段が高かった時代には結婚して由比に定着した者もいるという（静岡県教育委員会文化課県史編さん室　1992）。

ところで、私は人の移動を示す事例として、特に婚姻に着目して聞き取りをおこなった。次節では、その事例を取り上げながら由比をめぐる人の移動について見ていく。

4　由比への嫁入り

本節では、由比への人の流入の事例として嫁入りの事例を扱う。

静岡県教育委員会文化課県史編さん室によると、由比は基本的には村内婚で、村外からは、「浜石の裏側と由比は方角がいい」（静岡市清水区小島町区と町屋原区）といわれ、たくさん嫁入りがあった。他にも興津、旧富士川町、旧庵原郡、静岡市清水区由比今宿区からの嫁入りがあるという。しかし、山と海では生活の仕方が大きく違うため、小島町区から嫁に来た人は大変であったようである。また、嫁入り道具に関しても、町屋原区では箪笥の上に着物の振をそろえて積み、オヤモトで袋棚に箱物を詰めて来たら近所の婦人たちに着物が少ないと小声で言われたという。1936（昭和 11）年の嫁入りでは、荷物を座敷に並べ、引き出しを開けて組合衆や親戚の女衆に披露したという（静岡県教育委員会文化課県史編さん室　1992）。

以上の文献資料を踏まえて、野島章司氏（男性、66 歳、東山寺区在住）にミカン農家の多い東山寺区の 116 戸における配偶者の出身地について詳細な情報をもらった。これをまとめたのが表 2 である。これを見るに、配偶者の出身地は、旧清水市、旧庵原町（いずれも現在の静岡市清水区）が多いため、旧清水市、旧庵原町からお嫁に来た人に聞き取り調査を

行った。

次項では、その個別事例を見ていくことにする。

表 2　東山寺の婚姻相手の出身地別人数　（野島氏提供資料より深澤作成）

出身地	人数（人）
旧由比町内（由比）	32
旧庵原郡（蒲原・旧富士川町）	19
旧清水市	35
旧静岡市	3
富士市・富士宮市	6
その他県内	9
県外	11
海外	1

4.1　東山寺区

旧清水市などの周辺地域から東山寺区へ婚入した女性への聞き取りでは、出身地と由比との違い（生家と婚家の環境）や嫁入り道具について話を聞くことができた。

E 氏の事例（女性、72 歳、東山寺区在住）

E 氏は、静岡市清水区伊佐布区出身である。夫は東山寺の農家の長男だった。専業農家の知り合い同士で、1967（昭和 42）年に結婚した。

実家のある庵原と由比は似ているため、由比へのお嫁入りだからといって特段準備したことはなかったという。嫁入り道具には、箪笥 3 本、三面鏡、本箱、下駄箱、電化製品（こたつ、掃除機）、着物、布団などがあり、庵原（地元）の地域の人と持ってきた。お嫁入りのときは、商工会で結婚式をして、西山寺公民館で披露宴をした。披露宴は地域の人が手伝った。

地元では、「由比は派手なので由比にはお嫁に行くな」といわれていたが、実際はそうしたことはないという。E 氏は、結局は本人同士の話であると考えているそうである。

また、同じように庵原から由比にお嫁に来た人は由比全域に大勢おり、そうした人たちが集まる「庵原会」という組織があるという。「庵原会」は加入が任意で、現在は高齢の人が増え、亡くなった人もおり人数が減ったものの、集会には 15 人程が集まっている。以前はバスでどこかにでかけたりするということもあったが、現在の主な活動の内容は保健センターでおしゃべりをするなどである。ふるさとが同じため、気が楽で、皆がこの会を楽しみにしており、年齢は離れているが共通の話題が多く、地元の小学校周辺や、お菓子の話などで盛り上がったという。今でも会員が亡くなった時には香典を出したり、年 1 回の集まりを開いたりしている。

E 氏の保管していた資料によると、この庵原会は第 1 回が 1975（昭和 50）年に行われ、39 人の会員がいた。それから毎年開催されるようになったが、だんだんと会員が減っていった。2015（平成 27）年の庵原会は 9 月 27 日に開かれるという。

F 氏の事例（女性、70 歳、東山寺区在住）

F 氏は静岡市清水区興津承元寺町区の出身である。姑のいとこが実家の近くに住んでいたという縁があり、1972（昭和 47）年に結婚した。

F 氏の父は国鉄で働きながら兼業で農業をしていた。夫は銀行員で休みの日には農業をしていた。姑とも相性が良く、他にはいないくらい仲が良かったという。

嫁入り道具は婚礼家具一式であった。由比は漁師町で派手だからという理由で、「由比、蒲原にはお嫁に行くな」ということが興津で言われていたが、高校のときに接していた由比の人はおしとやかな人たちだったため、そうした言葉は気にせずに由比の人と結婚した。F 氏の実感では、由比の人は、言葉は悪いが、腹には何も持っていない気質で、人はいいと感じているという。「由比にはお嫁に行くな」というのも、要は個人個人の関係であると考えているそうである。

「庵原会」と同じように承元寺町区から嫁に来た人の会を、「やりたい、やりたい」と言って 7、8 年前に一度だけやったことがある。その時は 7、8 人集まり、年配の人が多かった。こちらはとくに「承元寺会」とは呼んでいないという。

G 氏の事例（女性、61 歳、東山寺区在住）

G 氏は、静岡市清水区上力町区出身である。実家はサラリーマンの家庭だった。嫁いだ当時、嫁ぎ先は専業農家をしていた。夫とは G 氏の勤め先の農協の行事で出会った。結婚する際に、夫は農家の長男ということがわかっていたが、農業の大変さはわかっていなかったという。G 氏の母が農家の出であったので猛反対されたが、夫の恩師と G 氏の父の勤め先の友人と由比の青年部の友人が 5、6 人で G 氏の両親を説得しに来てくれ、1976（昭和 51）年、結婚した。

1972（昭和 47）年頃から農業が低迷した際には、嫁ぎ先は大きな農家だったのである程度は大丈夫だったが、後に兼業農家となった。学生の頃に、実家の近くにあった田んぼで夫婦が一緒に仕事していたのを見て G 氏は、サラリーマンの家庭にはお嫁に行きたくないと考えていたという。農家に嫁いで大変だと思ったのは、雨の日は休みだが、それが不定であることだった。また、嫁ぎ先ではミカンの作業時期である関係で 12 月いっぱいは忙しいため、年の暮れは大掃除をしないこと驚いたという。

結婚の際、由比の人は派手だと親は気にしていたが、派手なのは沿岸部の方だけで、こっち（東山寺区）の人はそんなことはないと言ってくれた。とはいっても、嫁ぎ先のあたりでは嫁入り道具を飾るので、共働きだった G 氏の両親が、娘に恥ずかしい思いをさせまいと嫁入り道具をしっかりと用意してくれたという。

東山寺区での聞き取りからは、農家同士の婚姻だけでなく、職場結婚で農家に嫁いできた事例も聞くことができた。農家同士の場合は親を介した紹介なのに対して、サラリーマン家庭から農家へ嫁ぐ際は周囲の反対などといった反応の違いが見られた。また、「庵原会」や、承元寺町区から嫁いできた人の集まりなど、同じ出身の人でつながりを持っていることもわかった。特に「庵原会」については今でも存続しており、嫁いできた人たちの心の支えになっているのだろう。

4.2　西山寺区

続いては、阿僧区を挟んで東山寺区の西に位置する西山寺区でも旧清水市などの周辺地域から嫁いだ 3 人の女性に話を聞いた。その内容を以下にまとめてみよう。

H 氏の事例（女性、66 歳、西山寺区在住）

H 氏は両河内区出身で、実家は林業をしていた。実家と嫁ぎ先はどちらも 20 何代も続くような家系の農家であった。嫁ぎ先の家は同じような田舎からお嫁さんをもらいたかったそうである。また、親がお互いの父親が農高の出身だったことから、つてをたどってお見合いが成立した。ちなみに、H 氏の夫も農高出身である。

H 氏が嫁いだ時は車で来たので、薩埵峠の方からまわってきた。H 氏自身は、実家が林業をしていたこともあり、農家の大変さを分かっていたので、農家にはお嫁に来たくないと考え、本当は都会に出たかったため、結婚の話も最初は断っていたという。結果的にいい人だからということで 1973（昭和 48）年に結婚した。

嫁に来る少し前は海も山も活気がある時だった。当時、嫁ぎ先は専業農家だったが、しばらくしてミカン農業がふるわなくなった。H 氏は子供を学校に行かせるために、夫のミカン農業を続ける傍ら H 氏はゴム加工の事業を始めた。

嫁入り道具は和ダンスなどの箪笥 1 棹、三面鏡、洗濯機、電子レンジ、冷蔵庫、ピアノ、着物、日本人形などで、箪笥の中身は親が詰めた。これらを運送業の人が運んできた。ここでは嫁ぎ先の親が、嫁いできた嫁が何を持ってきたか見る。そのため昔は恥ずかしくないようにたくさん持たせた。持ってきた日本人形は自分で作ったものだった。結婚する前は、短大卒業後、花嫁修業として和裁、洋裁、お茶、お花を習った。

里帰りは、盆正月は 1 週間くらい帰っていたが、秋と春の農休日は仕事を手伝いに来てもらっている労働者のこともあり、あまり長くは帰れないため、1 泊で帰った。実家との距離については、車を借りて帰っていたから昔から遠く感じなかったが、そのころ車を運転できる女性はまだ少なく、バスは 1 時間に 1 本しかなかったという。

「由比にはお嫁に行くな」というようなことは言われたかという質問に対しては、たしかに、由比の人は気性が激しくて乱暴に感じられたという。それよりも、農家に嫁ぐことの方が嫌であったが、実家も林業をしており夫は農家の長男であり、環境が似ていたので比較的

楽だったという。

ただ、嫁ぎ先の家はとにかく人の出入りが激しく、植木屋が泊まりで来たり、若い頃は、農業高校の生徒が研修に来たり、援農者が来たりした。援農者は皆若く、毎年同じ人が来ていた。一部の人とは今も行き来があり、こっちからはミカンを、元援農者からは米を送り合ったりしている。援農者同士で結婚した人も多く、そのうち女性は夫の地元に帰っていった。この人の仲人は H 氏の家の人が務め、現在も繋がりがあるという。

今では嫁いでかなり経つので、由比の人になった感じはする。由比の人は漁師が多いから乱暴で、自分も自然と声が大きくなって、おしとやかではなくなったという。H 氏も事業を始めたため、やることも多く、じっと座っていられないほど、「まめったく」なったという。由比の人は誰にでも親切であるという。人が集まれば飲んで食べる。今は仕事をしている人が多く、家にいないので来る人もいないが、はじめは近所の人が来るとお茶ではなくお酒を出すことにも驚いたという。

I 氏の事例（女性、西山寺区在住）

I 氏は静岡市清水区小河内区の出身である。1960（昭和 35）年にお見合いで結婚した。実家も嫁ぎ先も専業農家であったが、今は農地も荒れているそうで、野菜をつくるくらいであるという。嫁入り道具には箪笥類や三面鏡があった。実家と職業が同じなので、そんなに変わらないと思った。由比には嫁に行くなと言われていたかに関しては、洋裁学校に行っていた頃、友人と「由比の方にはいかないようにしよう」といっていた。そのころ漁師の人が多い町で威勢がよくて派手にやる人が多かったという。

J 氏の事例（女性、76 歳、西山寺区在住）

J 氏は小河内区出身で、結婚した年は 1965（昭和 40）年頃に恋愛結婚をした。親からは反対された。嫁ぎ先は建築業で嫁入り道具はたくさんあり、箪笥などがあった。由比の西側にそびえる浜石峠の頂上で行われる行事で夫とのかかわりがあったというが、詳細は覚えていないということであった。

西山寺区では、いずれも皆農家へ嫁いだ人から話を聞いた。そこからは、豪快な由比の人の気質などについて外部からの視点を知ることができた。

浜石岳などへ続く峠道に近い西山寺区ではヨメッコ道についても聞いてみたものの、なんとなく聞いたことがある程度に知っているとのことだった。J 氏の事例では、浜石岳という境でおこなわれた行事で夫と出会ったとあり興味深かった。

4.3　婚姻によって由比の人になる

由比が地区外の人に漁師町として見られていたことから、由比の人の気質は、派手なので「由比にはお嫁に行くな」といわれていたことは興味深かった。しかし、今回は農家をして

いる家が多い地区で聞き取りをおこなったため、慣習の違いで苦労したということはあまり聞かれなかった。聞き取りからは、農家同士の場合は由比と由比以外とで大きな違いはないようである。しかし、由比の生活や習慣の違いに少し驚く人もいたようであった。

また、興津川流域からの嫁入りが多いのは、数人の語りの中にもあるように、生家と婚家の環境にさほど違いがないため、お互いの負担が少ないためだと言えるだろう。また、「庵原会」という集まりがあることは、それだけ旧清水市などの周辺地域から由比へお嫁に行く人も多く、人の行き来が頻繁であったことの表れである。庵原会の存在からは同じ出身地の人同士がつながりを大切にしていたこともうかがえる。

5　考察：産業と婚姻から見た人の移動

以上、本稿では由比の産業と婚姻を通して人の移動の様相を見てきた。

東海道線のイメージから東西交通が注目されがちな由比であるが、複数の内陸に伸びる道が存在し、コニダ、イサバ、ヨメッコ道、塩の道など、内陸部の交易が由比の生活を支えており、多くの人の行き来があった。つまり、由比は東西交通と南北交通が交わる重要な位置を占めていたと言える。

また、1945（昭和 20）年代から 1975（昭和 50）年代過ぎにかけては、由比のミカン産業に関連した労働者の流入があった。季節労働者としてやってきた人は、地元とは異なる由比の温暖な気候が生んだ豊かな産業に雇用の場を見出していた。

さらに、婚姻によって由比にやって来た人からの聞き取りでは、「由比にはお嫁に行くな」など、由比に対する外からのある種の先入観、言い換えれば由比と外をへだてる境界意識を知ることができた。旧清水市など周辺の地域から嫁いだ人たちが、由比の中で同郷の会を作り、現在もつながりを持っていることもわかった。

ここで注目したいのは、由比の内と外の存在するつながりとへだたりという、相対する意識である。髙谷紀夫と沼崎一郎は、「つながり」は、「まとまり」や「ひろがり」を作り出す一方で、「へだたり」も生み出すと述べている（髙谷紀夫・沼崎一郎編　2012：9)。交易や産業、農家同士の紹介やお見合いといった一部の婚姻で外とのつながりがあった一方で、「由比にはお嫁に行くな」という語りからは、由比の内と外を示すへだたりを見出すことができた。そして、由比へ嫁いできた人への聞き取りから見えたように、そのへだたりは個人の生活の中で解消されていたことがわかった。

6　おわりに

調査を始める前は、由比というと一見山と海に囲まれた狭い範囲としか考えられなかった。しかし、由比は交易の要所であり、東西だけでなく南北にもつながりがあり、周辺地域と多くのかかわりを持っており、狭い視野では捉えきれないものであった。また、人の移動

に目を向けることで、由比の産業とのかかわりだけでなく、人同士のつながりやへだたりといった関係を見ることもできた。

謝辞

本調査をおこなうにあたって、多くの方々にご協力いただきました。皆様あっての調査でした。また、急な訪問や、私的な内容に至るインタビューにも快く応じてくださり、大変感謝しております。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

参照文献

海野福寿・奥村若太郎編
1983 『静岡県の歴史＜上巻＞』毎日新聞社。
建設省静岡国道工事事務所
1994 『東海道薩埵峠――東と西の出会う道』社団法人中部建設協会。
黒田茂夫
2009 『街の達人 静岡 便利情報地図』昭文社。
静岡県缶詰史編集委員会
1975 『静岡県缶詰史』社団法人静岡県缶詰協会。
静岡県教育委員会文化課県史編さん室
1992 『町屋原・今宿の民俗―庵原郡由比町―』静岡県。
昭和のアルバム編集室
2015 『昭和のアルバム 静岡・清水』株式会社電波実験社。
髙谷紀夫・沼崎一郎編
2012 『つながりの文化人類学』東北大学出版会。
由比町史編さん委員会
1988 『由比町史』静岡県由比町教育委員会。